



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 加藤 誠
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

「佐々木さんとのお付き合いのなかで考えたこと」

東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター・センター長 / 教授
アジア経済研究所新領域研究センター上席主任調査研究員

武内 進一

たけうち しんいち

佐々木さんと知り合ってから、もう 15 年ほどになります。知り合った頃の私には、信仰に基づいて和解の実践にコミットしている佐々木さんと、そうしたバックグラウンドがない自分とは世界が違うという意識がありました。それなりの時間が経って、佐々木さんの研究やお仕事が少しずつ理解できるようになり、自分の意識も変わってきました。私は今も信仰を持つ人間ではありませんが、佐々木さんを尊敬する友人だと思っています。この文章では、自分がどのようにルワンダに関わるようになったかをお話ししたうえで、佐々木さんとのお付き合いのなかで考えたことを率直に綴ってみたいと思います。

*

私がルワンダに初めて入ったのは 1998 年です。アジア経済研究所の調査員として、自分の担当国を調査するためでした。アジア経済研究所は発展途上国全般をカバーする研究機関で、現在は日本貿易振興機構 (JETRO) の付置研究所になっています。私はそこに 1986 年に就職し、中部アフリカ仏語圏諸国を担当せよと命じられました。中部アフリカで最大の国はコンゴ

民主共和国で、当時はザイールと言いました。私はザイールの専門家になるべく、そこに 2 年間赴任して調査研究を行うつもりでした。

ところが、ザイールは 1990 年代に入ると政治情勢が悪化し、とても長期滞在して調査できる状況ではなくなります。そこで、コンゴ川を挟んでザイールの対岸にあるコンゴ共和国に調査対象を変えることにしました。この頃、私の関心は食料問題でした。この地域の主食はキャッサバというイモですが、これがどこでどのように作られ、どうやって首都に運ばれ、人々の胃袋に入るのかを調査しようと、1992 年 10 月にコンゴ共和国に赴任したのです。

1990 年代初めは、冷戦終結の直後です。この時期アフリカの多くの国が政情不安に苦しみました。ザイールもルワンダもそうですが、コンゴ共和国も同じ運命をたどります。私が赴任した直後から政情が悪化し、翌年には首都で銃撃戦が始まりました。私はコンゴ共和国に 2 年滞在する予定だったのですが、1993 年には何度も避難を強いられ、とうとう 1994 年 1 月末に調査を諦めて出国しました。パリでしばらく暮らしたあと、コンゴ共和国の隣国ガボンの大学に

受け入れてもらい、半年ほど滞在することになりました。ガボンの首都の空港に降り立ったのは、1994年4月8日のことです。ルワンダで大統領搭乗機が撃墜され大虐殺が始まった2日後でした。

ガボンでの滞在は、世界の視線がルワンダに注がれた時期と重なっています。私自身はガボンでも食料に関する調査を続け、首都から離れた農村に滞在する機会もありましたが、普通の村人がラジオを聞いてルワンダの状況に心を痛め、「どうしてアフリカではこんなことばかり起きるのか」と話していたのをよく覚えています。その後、ガボンでの調査を終えて帰国し、食料問題に関する論文も書きましたが、やはり自分がブラザヴィルで直接経験したアフリカの紛争のことをきちんと勉強したいと思い、ルワンダで調査しようと決めたのです。

*

初めてお目にかかったとき、佐々木さんはブラッドフォード大学の博士課程に在籍し、ルワンダの和解をテーマに博士論文を書こうとしていました。私はルワンダを研究する者として佐々木さんと知り合い、仲良くなりました。佐々木さんの研究は、実態調査に基づく水準の高いものです。私は常々、佐々木さんの研究がもっと日本語で読めるようになればよいのにと考えてきました。その意味で、一昨年に京都大学のプロジェクト「アフリカ潜在力」シリーズのなかで佐々木さんの論考が出版されたのは、とても嬉しいことでした（佐々木和之「＜和解をもたらす正義＞ガチャチャの実験 ルワンダのジェノサイドと移行期正義」遠藤貢編『武力紛争を越える せめぎ合う制度と戦略のなかで』京都大学学術出版会、2016年、265-294頁）。

佐々木さんと私の大きな違いは、実践への関わり方です。私はこれまで自分を研究に限定し、NGO活動のような社会実践にはほとんど関わってきませんでした。研究の究極的な目的は社会の役に立つことですが、「社会の役に立つ」と



<写真：西部のキヴ湖付近の風景>

キヴ湖は佐々木さんと最初に会ったときに一緒にしたところです（武内進一）。

いっても、ことはそれほど簡単ではありません。私たちが生きている社会はとても複雑なので、誰のために、何のために、ということを考えてと安易に実践に踏み込めませんでした。歴史上、社会の役に立つという看板を掲げ、結果として問題を引き起こした研究は枚挙に暇がありません。

佐々木さんの研究は実践と深く結びつき、それを前提にしています。初めてお目にかかったとき、この点が自分と決定的に違うと感じ、自分とは違う世界にいる人だと考えていました。しかし、時間が経つにつれ、徐々にそうした意識は薄れてきました。それには幾つか理由があります。

佐々木さんと付き合いの中で、私は彼を研究者として信頼するようになりました。佐々木さんは現在のルワンダを手放して礼賛しているわけではありません。内戦後良くなった部分もあるけれど、依然として問題もあるという姿勢でルワンダを見えています。その認識は、私も共有しています。佐々木さんとの会話のなかで、研究者として多くを学びました。

佐々木さんの実践に対する私の理解も深まりました。ある時期まで私は、佐々木さんの取り組みの意味がよく理解できませんでした。和解

と共生を促すための取り組みはとても重要だけれども、ルワンダ全体からみれば、「大海の一滴」です。そのことをどう考えればよいのだろうと思っていたのです。

しかし、徐々にわかってきたのは、佐々木さんの取り組みが徹底的に相手に「寄り添う」ものであり、その大切さは何物にも代えがたいということです。和解や共生を掲げた援助プロジェクトはたくさんありますが、佐々木さんのように、相手中心に考え、相手に寄り添う取り組みはほとんどありません。長年ルワンダに住み、ルワンダ語を学び、同じ地域に通い、人々と対話し、人々との間に信頼関係を築いてきた佐々木さんだからこそ、人々のなかに和解に向けた機が熟したとき、自らのイニシアティブで和解や共生のための行動をとるよう手助けできるのです。佐々木さんは人生をかけてルワンダの人々に寄り添い、それによって質の高い実践が可能になっている。そのことがわかってきたのです。

そして、おそらく最も重要なのは、ごく単純に佐々木さんとウマが合う、ということです。私は佐々木さんに対して、崇高な実践に生きる偉人、という感覚を持っているわけではありません。トム・ウエイツが好きで、お酒が好きで、奥様との間で「めぐごーん」、「ごんちゃん」などと呼び合っている佐々木さんが、私は好きなのです。だからこそ、これまでルワンダを訪れるたびに彼に会い、フィールドでの観察を語り合ってきたのだと思います。

*

何が起こるか分からないもので、1年前から私は東京外国語大学（東京外大）に新たに設立された現代アフリカ地域研究センターのセンター長を務めることになりました。このセンターは、アフリカ諸国の大学との関係強化と、研究教育の連携促進をミッションの一つとしています。このミッションをどのように進めようかと考えたとき、佐々木さんとプロテスタント人文

社会科学大学（PIASS）のことが自然と頭に浮かびました。

ブラッドフォード大学で博士号を取得し、2011年以來PIASSで勤務されている佐々木さんのもとには、毎年数人の日本人が留学し、紛争と平和について学んでいます。その数は既に20人に達し、うち10人以上が東京外大の学生です。佐々木さんの活動を知った学生が、ルワンダで平和について学びたいとPIASSを目指すが、一方でPIASSから日本に留学したケースはありません。ルワンダから日本への留学は、航空運賃や滞在費がネックとなっており、とても難しいのです。何とかPIASSの学生を東京外大に呼べないかと考え、2018年4月からクラウドファンディングを始めることにしました。

このプロジェクトは私にとって、幾つもの意味で大切な取り組みです。佐々木さんのもとで学ぶPIASSの学生には、日本への留学を渴望する者が少なくありません。優秀な学生を東京外大に招けば、その学生の夢が叶うだけでなく、東京外大の学生にとっても大きな刺激になります。東京外大はインテンシブな日本語教育とともに幅広い教養科目を英語で提供するカリキュラムを持っており、アフリカを専攻する日本人学生もいます。アフリカからの留学生が勉強するには、とてもよいところです。この環境で学ぶPIASSの学生は、二つの大学だけでなく、日本とルワンダとの懸け橋になってくれるでしょう。

私は、この取り組みがルワンダのため、日本のため、さらにはアフリカのためになると確信しています。同時に、長年研究をさせてもらったルワンダに少しでも恩返しができること、そして佐々木さんと一緒に仕事ができることをこの上なく嬉しく思います。私にとってのささやかな実践ですが、社会がよい方向に変わることを願っています。

「悲しみに寄り添い、ともに生きる」

佐々木 和之

ささき かずゆき

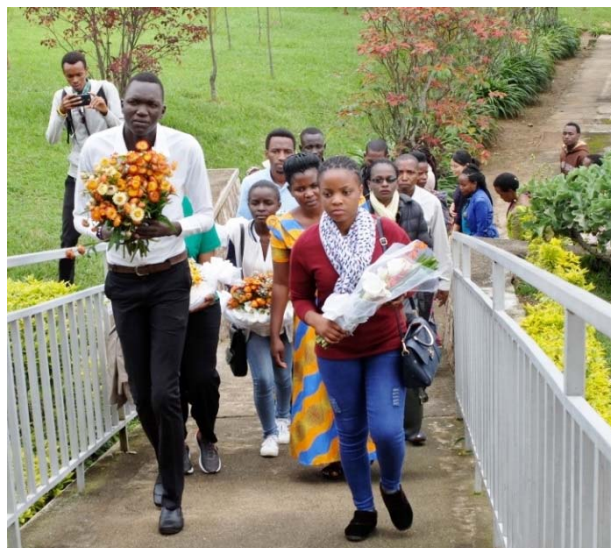
ルワンダでは4月7日からジェノサイド追悼記念期間が続いています。いつもこの時期は外国人である私ですら気持ちが沈みがちになるほど、国中が独特の重苦しい雰囲気になります。今年も既に12回、ジェノサイドを記念する集会に参加していますが、被害者、加害者、それぞれの家族が共存する社会において、「過去を記憶」し続けることが大きな痛みを伴うことであることをあらためて感じさせられています。

ニャンザの女性たちの追悼集会

5月1日、女性グループ「ウムチヨ・ニャンザ」が企画したジェノサイド追悼集会にプロテスト人文社会科学大学(PIASS)ピースクラブの学生たちと一緒に参加しました。40名以上の学生たちと15名のウムチヨ・ニャンザのメンバーたちがニャンザのジェノサイド記念施設に集まりました。7名はジェノサイドで家族を失った女性たち、8名は夫が加害者である女性たちです。

初めに施設の一階にある犠牲者の遺骨が安置された部屋を訪ねました。数えきれないほどの棺の中に2万以上の犠牲者の遺骨が納められているのですが、その中には女性グループのメンバーの親族が含まれています。遺骨が湿気を吸い込んでいるためでしょう、すえた臭いが立ち込めていました。数名の女子学生は、込み上げる感情を抑えることができなくなり、他の学生たちに抱きかかえられながら屋外で待機することになりました。

40分ほど後、施設の二階に移動しました。そして、参加者全員が一人一人、その階の中央にある巨大な献花台に盛り花や花束を捧げる時間を持ちました。それらは全て、昨年10月に女性たちが球根やタネを植え付けて以来、大切に育てた花々を自分たちでアレンジしたものでした。素朴で自



然な色合いが心を和ませる、追悼式にふさわしい花々でした。

献花の後、皆で輪を作ってそれぞれの思いを分かち合いました。フランソワゼさんは、失われた家族や知人の名前を一つ一つ読み上げながら、涙がこぼれ落ちるのを抑えることができませんでした。アルフォンシンさんは、逃避行中に川を泳いで渡る時に2人の子どもたちと生き別れたことを嗚咽しながら語りました。そして、その彼女たちの隣には、ティッシュで涙をぬぐってあげたり、肩を抱きかかえてあげたりしながら共に悲しみ、慰める女性たちの姿がありました。

ジェノサイドで数多くの親族を亡くした人々の悲しみが癒えることはないのかもしれませんが、しかし今やウムチヨ・ニャンザの女性たちは、その悲しみに寄り添ってくれる仲間を得たのです。

新プロジェクトのスタート!

前号でもお伝えしましたが、今年度からウムチヨ・ニャンザの女性たちが進める和解と共生の歩みをさらに後押しするため、これまでの「お花畑プロジェクト」をさらに発展させた「ニャンザの

光」平和と生活向上プロジェクトを開始しました。

手芸・洋裁技術向上のためのトレーニング、ミシンの購入と工房の確保、切り花、手芸・洋裁品のマーケティング、さらには協働組合設立のための規約作りや会計システムの整備などの支援を行います。また、女性たちの和解と共生の歩みが広がっていくように、彼女たちの子どもたちの関係づくりや共同で行なう活動の支援、さらには、彼女たちの家族である男性たちとの関係づくりにも取り組みます。3年間で約165万円の予算が必要です。どうぞご支援をよろしくお願いいたします。

プロジェクトの一つの活動として力を入れているのは、アフリカ製のカラフルな布「キテンゲ」を使ったブックカバーの製作です。昨年既に120枚を販売して収益を上げていますが、現在も品質向上のために週に一度妻の恵が日本人留学生5名を伴ってニャンザに通い、指導を続けています。将来的には注文販売も始めたいと思います。ご興味のある方は支援会事務局にご連絡ください。



ブックカバー作りのトレーニングが一段落し、実は昨日、新たな活動が始まりました。乾燥させた貝殻草の花を使った髪留めやピアスの製作です。アフリカの豊かな日差しの下で育った貝殻草の美しさを生かし、何か製品が出来ないだろうか考えた私が恵に相談し、ピアスや髪留め等の試作品を作ってもらったところ、女子学生たちから「ぜひ買いたい」と好評を得ました。そこで昨日はじめて、恵と日本人留学生たちが女性たちと一緒にアクセサリー作りに取り組み



ました。女性たちはとても積極的で、思っていたよりもずっと手際よくアクセサリーの試作品を作り上げました。日本でも販売できるような質の高いものになるように、来週もトレーニングを続けることになっています。

ルワンダから日本に留学生を！

ジェノサイド追悼記念週の翌週、PIASSの第2学期が始まりました。今期私は「平和学概論」、「紛争解決論」、「非暴力の理論と実践」、「リサーチ方法論」を担当します。

最近のPIASSにとってのビッグニュースは、今年の秋から日本へ留学生を送り出せることになったことです。PIASSの平和紛争研究学科で学んだ日本人留学生は、これまでに20名に上ります。しかし、日本での生活費や航空運賃を負担できないため、ルワンダからは日本の大学に送り出すことができずにいました。そこで、PIASSが交流協定を結んでいる東京外国語大学が、年2名の学生たちを受け入れるために奨学金を保証した上で、さらに航空運賃や生活費の上乗せ分を確保するためにクラウドファンディングを始めてくださいました。現時点で90名ほどの方々のご支援いただき、今年の秋に2人の学生たちを派遣する必要経費100万円の目標を達成することができました。現在、来年以降も学生たちを送り出せるように、さらに100万円、合計200万円の目標が掲げられています。期限は5月31日。目標達成のためにご協力をよろしくお願いいたします。

「ルワンダで学んだ『平和』」

小林 聖実

こばやし さとみ

東京外国語大学4年生。PIASS平和紛争研究学科に2018年1月まで留学



こんにちは。東京外国語大学4年生の小林聖実と申します。2017年3月から2018年1月の約10か月間、佐々木先生のもとPIASSに留学させていただきました。ルワンダではたくさんのことを学ばせて頂いたのですが、特に心に残っているいくつかのことをご報告させていただきます。

平和や紛争に関心を持ったのは、少年兵の存在を知った高校生のときでした。大学3年生のとき、アフリカの学生と机を並べて平和について勉強できると知ってPIASSへの留学を決意しました。

授業が始まると、さまざまなアフリカの国からの友達ができました。彼らは、明るく優しい人ばかりです。くだらないことで笑ったり、ときには真剣に議論したり。そこにあったのは、故郷と家族を愛する、私たちと変わらない学生の姿でした。

10月には、数年前に深刻な政治危機を経験したブルンジを訪ねました。正直、訪れる前は「紛争を経験した国」「世界最貧国のうちのひとつ」というイメージがあり、どのような人々が住んでいるのか想像もつきませんでした。当然のことながら街があり、美しい湖があり、人々はごく普通に生活を営んでいました。滞在中はブルンジ人の友達の家に泊めさせてもらい、彼の温かい家族と素敵な時間を過ごすことができました。

した。彼と彼の弟とギターを弾きながら歌った夜がとても懐かしいです。

私がアフリカに来て学んだことは、「みんな自分と同じように生きている」ということです。日本から遠く離れたこの地で、文化も言葉も異なる友達とはしゃいで笑っているとき、彼らの家族に出会ったとき、そしてその家族の温かさのなかで「愛されて育ったんだろうな」と感じる事ができたとき、彼らと分かり合えた気がして、とても不思議で嬉しい気持ちになりました。

もし留学が12月までだったら、私の学びはここまでだったと思います。アフリカを初めて訪れた私にとって十分大きな収穫でしたが、私はある授業を受けるために1月まで留学を伸ばしました。「和解の理論と実践」という授業です。そこで、自分が感じてきたことを揺るがすような出来事がありました。

授業の一環でムランビ虐殺記念館を訪れた日のことです。この虐殺記念館は、当時殺害された人々の遺体がミイラ状になってそのまま展示物になっています。その賛否はあるものの、とにかく一度見たら忘れることはできません。24年前のジェノサイドを現実のものとして私たちに突き付けてくる記念館です。

私にとってこの訪問は3回目でした。アフリカの友達と訪れるのは初めてでしたが、最初はその意味について深く考えることはありませんでした。

その遺体の展示室にさしかかったときです。ルワンダ人学生の一人が、声を上げて泣き崩れました。彼はいつもふざけてばかりの、少年のような笑顔が印象的な人でした。そんな明るい彼が、嗚咽を上げて泣き始めたのです。ほかのルワンダ人学生たちも、次々とグループを抜けて涙を流しています。私は、あまりに突然の出来事に呆然としてしまいました。

皆で感想を共有する時間では、あるコンゴ人の学生が暴力から逃げてきた経験やお父さんを亡くしたことを話してくれました。話しながら彼の流した涙は、私にとって衝撃的でした。彼は頭が良くて授業でもよく発言し、尊敬する友人の一人だったからです。

その次に話してくれたのは、先ほど声をあげて泣いていたルワンダ人の彼でした。「僕は、平和が好きだ。でも、それを経験したことはない。」彼はそう言い放つと、また涙を流しながらお父さんを失ったジェノサイドの経験を話してくれました。

彼は、まるで昨日父親を失った少年のように泣きました。無残に家族を殺された苦しみは、どんなに時が経ったとしても人を蝕むのだと知りました。

私に泣く資格はない、と思いました。それでも、私は堪えることができずに泣いていました。彼らがかわいそうだから涙が出てきたのではありません。私は10か月もここで勉強したというのに、一体彼らの何を理解したというのだろう。その肩を叩くことも許されないと感じるのはなぜだろう。紛争を経験した友達と私の心の中に、一生かかっても理解することのできないもの、なくすことのできない大きな溝を感じてしまったのです。そのとてつもない寂しさに、涙が溢れました。

紛争後の和解について考える授業ではありましたが、その難しさに直面せざるを得ませんでした。家族の死はこんなにも人を苦しめるのに、その殺した当人を赦すことなど到底不可能のように思えました。

しかしだからこそ、授業のなかで和解に立ち向かう人々に出会う感動は、ひと際大きいものでした。

一つ目は、キレヘ地方で和解を成し遂げたサラビアナさんたちが、経験をお話するために PIASS を訪れて下さったときのことで、実は、私は以前にキレヘを訪れたことがありましたが、この授業で感じられたサラビアナさんたちの関係性は、私にとって以前よりもさらに深みを持って価値あるものを感じられました。

二つ目は、授業の最終日に来てくださった卒業生ア

リスさんのお話です。彼女は、報復でフツのお父さんを殺害されるという壮絶な体験をされてきました。「ツチに対するジェノサイド」という言い方を強め、自らの殺人については言及しようとし、ない現政権のもと、彼女はツチの人々とはまた違う苦しみを味わってきました。

彼女のお父さんの最期の言葉は、「誰も憎むな。」というものでした。彼女はその言葉に精いっぱい従おうとして生きてきたのです。「和解は可能です。」と彼女は言いました。

途方もない哀しみと憎しみに立ち向かうとき、自分ならどうするだろうとずっと考えてきましたが、彼女たちが出した答えは和解を「諦めないこと」でした。痛みや罪と向き合うことから目を背け、すべてを忘れたふりをして生きていくこともできます。しかし、サラビアナさんも、その思いに応えた加害者の方も、もう一度手を繋ぐことを諦めなかったから和解を達成することができたのです。とても難しいことだと思いますが、その遠い道のりの先に価値ある「平和」があるのだと思いました。

また、授業を受けたルワンダ人学生のなかにも変化が生まれていました。偏った考え方をしていた学生たちが「和解は可能であると思った」「ツチ、フツ双方から話を聞く大切さを学んだ」と語ってくれたのです。虐殺記念館で涙を流していた彼も、この授業で希望を見出したようでした。

そんなクラスメイトたちの言葉を聞いて、ルワンダでの和解はすでに始まっていると思いました。その瞬間に立ち会えたこと、そして彼らの力強さに私は本当に感動して、私自身も不可能かと思われた和解への希望を見出すことができました。

留学の最後に受けたこの授業は、それまでアフリカで築いた人間関係や経験が学びの糧となり、私にとって集大成的な体験となりました。

はたして私はアフリカの人々を理解することができたのでしょうか。友達の隠された涙を見てしまった今となっては、正直あまり自信がありません。しかし

だからこそ、彼らと友人として心から通じ合えた瞬間を大切にしよう、彼らに寄り添い続けよう、と強く思えました。

そして、様々な国から来た友達やその家族が笑いあっているとき、和解が達成されたとき、自分が感動したその瞬間ひとつひとつを忘れないでいようと思います。異なる国からの人々や敵対するグループの人々同士であっても手を取り合って笑うことができる。その事実、私は「平和」を感じることができました。これこそ、人間のあるべき姿だと思えました。まだまだ

だ対立や課題が山積している社会で生きていくなかで、自分が大切にしていきたいことを、ルワンダでは教えてもらったと思います。

佐々木先生と恵さんをはじめ、たくさんの方々にお世話になり、無事に留学を終えることができました。私事ですが、今年は就職活動を控えています。どのような未来が私を待ち構えているかは分かりませんが、「平和」に社会が少しでも近づくよう、ルワンダでの教養を胸に生きていこうと思います。

事務局からのお知らせ

- 今年度の佐々木和之さんの帰国は、10月下旬から11月下旬にかけて約一カ月を予定しています。
- 昨年3月にNHK BS-1で放映された佐々木和之さんのドキュメンタリー番組「明日世界が終わるとして」のDVDを貸出中。事務局洋光台キリスト教会（蛭川明男牧師）TEL 045-774-9861にお申込み下さい。
- 佐々木さんのルワンダでの活動は13年を超え、加害者と被害者の和解の取り組みに加えて、現在、非暴力・草の根で平和と和解を構想する若者たちを育てる働きを中心に据えています。佐々木さんの活動が続けられるために、年間100万円ほどさらに必要があります。支援会にご友人をお誘いいただけませんか。ご紹介いただいた方には、趣意書、申し込み葉書をお送りいたします。どうぞ、よろしく願いいたします。

● PIASS 平和紛争研究学科学生2名、東京外国語大学に留学！

東京外国語大学（現代アフリカ地域研究センター）では、ルワンダの若者に日本で学ぶ機会を提供したいとの趣旨で、クラウドファンディングにより渡航費などの支援を一般の方々に仰ぎ、PIASSから2名の学生の留学実現を目指すことになりました（<https://readyfor.jp/projects/asc-piass/>）。そこで、支援する会の皆様にもご協力を仰ぎたく、お願い申し上げます。クラウドファンディングについては、佐々木さんを支援する会 HP（<http://rwanda-wakai.net/>）でも紹介しています。ご参照ください。

● 佐々木さんを支援する会主催「ルワンダ第3回、和解の現場・訪問ツアー」

2019年9月に訪問ツアーをおこないます。虐殺の現場を訪ね、その悲劇を心に刻みつつ、佐々木さんの活動現場を訪問します。ぜひ、今からご検討ください。詳細は、今後ウブムエ等で紹介いたします。

事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

● 郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会 ●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ） <http://rwanda-wakai.net/>
佐々木さんの活動報告、写真等を掲載。HPから入会手続きも可能です。和之さん、恵さんのブログも更新しています。

- 世話人会 加藤 誠（大井教会牧師）、中條智子（長住教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）